

橋本佳延 主任研究員

六甲山地は、江戸期から明治期にかけては盗掘乱伐によって「はげ山」になっていたことで知られていました。明治期になると神戸の町の人口が急増し、安全な飲料水の確保と土砂災害の防止が重要な課題となったため、1902年から六甲山地ではマツ（アカマツ・



クロマツ)などの植林が開かれ、約120年が経過した現在では豊かな森林が育まれています。

草地や森林など、地面を覆う植物のまとまりを植生と呼びます。植生はさまざまな種類の植物が集まってできあがっており、その植物の種類の組み合わせは年月がたつにつれて変化します(この現象を植生遷移と

六甲山地の森林 未来はどんな姿に



植林後約120年が経過した再度山の森林(2019年11月撮影)

呼びます)。では、はげ山だった六甲山地の植生は、

どつてきたのでしょうか。また、今後どのような姿に変化していくのでしょうか。

この謎を解明するため、神戸市は、1902年当時マツなどが植林された記録が残る再度山に調査区を設け、研究者と共同で74年から5年おきに調査しています。私も99年からこの調査に参加しています。

これまでの調査から、再度山の植生は02年の植林後、約90年間はマツ林として保たれてきましたが、70年代から80年代にかけて広がったマツ枯れ病によって多くのマツが枯れると、乾燥しやすい尾根部や南向き斜面では、スダジイやアカガシなどのブナ科の照葉高木が林冠を構成する林(タイプA)に、谷部や湿り気がある程度保たれる北向き斜面では、コナラやアベマキなどのブナ科の夏緑高木が林冠を構成する林(タイプB)に遷移したことが分かってきました。

現在では、アカマツの林は管理された場所を除いて、乾燥の厳しい痩せ地にわずかに残るだけとなっています。

これらの森林の未来の姿はどうなるでしょうか。タイプBの林は、林内にスダジイやアカガシ等の稚樹、幼木、若木が生育しており、林冠を形づくる競争相手となる他の樹種も見当たらないことから、林冠のブナ科の夏緑高木が枯死すればタイプAの林へと遷移するものと予想されます。

タイプAの林については、この地域で自然性が高いとされている、再度山の南方にある大龍寺の敷地の照葉樹林(コジイ・カナメモチ林)へと遷移すると考えられています。しかし、タイプAの林には大龍寺の照葉樹林に生育する植物種がいくつも欠けているため、同じような森に遷移するためには、100年単位の長い年月がかかるかも知れません。

ひとく
研究員
だより